

京都市帝國大學經濟學會 經濟論叢

第四十六卷 第二號

昭和十三年二月一日發行

論叢

歐米に於ける日本學研究に就いて……………經濟學博士 本庄榮治郎
 支那農業の片影……………法學博士 財部靜治
 銀行機構に於ける通貨の創作……………經濟學博士 小島昌太郎
 統計教育論……………經濟學博士 蜷川虎三

時論

昭和十三年度の増稅……………經濟學博士 沙見三郎

講演

新興化學工業……………工學博士 喜多源逸

研究

生命保險事業に於ける投資の特性……………經濟學士 西藤雅夫
 企業結合と外部節約……………經濟學士 田杉 競

說苑

一追放學者の觀たるナチスの經濟理論……………經濟學士 中川與之助
 ヴァイナ一の國際貿易論研究……………經濟學士 松井 清
 リカアドウの爲替論と購買力平價說……………經濟學士 有井 治
 リーフマンの問屋制度論……………經濟學士 堀江英一

附錄

新着外國經濟雜誌主要論題

（禁轉載）

銀行機構に於ける通貨の創作

小島 昌 太郎

一

銀行の通貨創作の問題は、今日に於ては、銀行の貸付割引またはその他の方面に投下せられたる資金が、また、いづれかの銀行に預金として預け入れられることとなり、その預け入れられたる資金が、更に投資に向けられてまた預金に還流するの経過を繰り返すことにより、通貨が主として、預金の形に於て膨脹することを指すものである。併しながら、この問題が、最初に注意せられた時代には、投資と預け入れとの或程度までの連続反轉といふことは、強く認識せられずして、むしろ預け入れられた資金が貸出された場合に、それは現金を以て取出されず、小切手を以て支拂に充てられ、その小切手が多数の人々の間に轉々支拂に用ゐらるゝことによつて、現金の代りを勤め、巨額の現金を節約し得る點を強調して、これに銀行の通貨創作の意味を見出したものであつた。

京都帝國大學の藏書の中で、金融を主題とした論文の、最も古いものは、一八二七年リヴァプールで發行せられた John Ashton Yates の *Essays on Currency and Circulation, and on the Influence of our Paper System on the Industry, Trade, and Revenue of Great Britain* であるが、それは、次の如くに説明して、この問題に觸れて居る。

「銀行の増加は通貨の流通速度を益々速かならしめることゝなつた。その理由は、銀行が附近の地になかつたならば、通貨を無駄に手許に遊ばせて置くであらう所の一般公衆から、銀行は絶えず、それを預金として受け入れ、またこれを通貨の借り受けを希望する他の人々に貸付くるからである。ロンドンに於ては、甚だ小額の支拂も、非常に巨額の支拂と同様に、銀行宛小切手を以て決済せられる習慣が、殆んど全般的に行はれて居る。それには何等の手敷料を課せられることがないのであるから、商業家は現金の保管と計算についての危険と煩勞を避けんがために、一般にこの方法を願範圍に利用して居るのであつて、この現金の支拂の指圖書の日々の流通額は、それを直接に取扱はない人々にとつては殆んど信じられない位の巨額に達して居る。これらの小切手は、甚だ巨額の貨幣の代りとなり、支拂のために呈示せられるまでには、屢々多數の人々の手に轉々移り變るのである。地方的都會に於ては、この組織はまだ多く發展して居ない。併し、銀行家の總てのものもつ所の、資産家が預け入れた貨幣を最も有利に運用せんとする希望は、銀行の存在する土地ではどこでも、この貨幣を、彼等が安全と思ふ商人達に貸付けるやうにせしめて居る。かくて、製造業や商業が股盛であり、大部分の人口が都會に集中して居る國々では、銀行組織が頗る完成されて居るから、農業國で人口が人里離れて散布して居るやうな所に於ては、一千磅の貨幣を必要とするやうな取引でも、常に、僅に一百磅の貨幣を以て用立て居るのである。¹⁾

二

銀行機構に於ける通貨創作の問題を取扱つたものとしては、これよりも前に、アレキサンダー・ハミルトンが

1) Yates, Essays on Currency and Circulation, p. 13.

ある。サミュエル・マツケー編纂の、ハミルトン論文集には、この問題が次の如くに述べられてある。

（銀行がなす貸付金といふものは、どれでも、借手に對して帳簿上で與へた信用 (credit) の形に於て先づ存在する。そして、銀行は、その金額まで、その銀行の銀行券でも、金貨でも銀貨でも、借手の好むがまゝに何時にても、支拂ふことになつて居るのである。併し、大多数の場合に於ては、そのどのものを以てする支拂も、現實には求められることゝはならない。借手は、彼が支拂をせねばならぬ人に對して、小切手または手形を以て、その信用を移譲するのであり、その人も亦、同様の信用を以て得心して居るのである。彼も、何時にてもそれを現金に換へるなり、または、同額の支拂のために、それを更に他人に移譲するなり、どちらも可能なことに満足して居るからである。そして、このやうな有様で、信用は、その移譲の度毎に貨幣としての役目を果し、遂に、銀行に對して同額または以上の額の支拂をせねばならぬ人がこれを以て割引を受くることによつて、消滅するに至るまで、流通を續けるのである。かくて一片の鑄貨をも用ゐることなく、巨大の金額が、貸出され、屢々種々な人々の手を経て、支拂はれて居るのである。¹⁾

これら初期の銀行理論家の見る所は、いづれも、現金の預け入れを受けた銀行は、これを資金として貸付をなすのであるが、その貸付は、現金を交付するのではなく、何時にても支拂をなすといふ「信用」を設定するのであり、その信用を本として、借受人が小切手を振出して支拂に充てることにより、常に現金が節約せられるばかりではなく、その小切手は何回もの支拂に用ゐらるゝがゆゑに、最初の預け入れの現金の額に數倍する所の金額の取引を決議するの作用をもつことゝなる。これが銀行が創作する所の通貨であるといふのである。

1) Report on a National Bank, Communicated to the House of Representatives, December 14, 1790; in the "Papers on Public Credit, Commerce and Finance, by Alexander Hamilton, Edited by Samuel McKee", 1934. p. 55.

三

初期の金融問題の論述者は、通貨の創作の問題に觸るゝ所はあつたけれども、必ずしも、それを強調したものではなかつた。然るに、マクロウドは、だゞにこの問題に觸るゝといふ程度に止まらず、頗るこれを強調する所がある。

マクロウドは、ハミルトンよりは凡そ一世紀も後に有名な *Theory and Practice of Banking* を著作したのであるけれども、彼にあつても、その謂はゆる信用の膨脹なるものは、預金として預け入れを受けた現金を本として、銀行は、それに幾倍する金額の貸出をなすのであるが、その貸出は、信用の形、すなはち預金の形に於て、行はれるといふ點を見るのみである。換言すれば、この預金の形で貸出されたものが、引出されて後、更に預金となり、貸出となることを反復繰返すことは、注意されて居らないのである。すなはち、この預金の形で貸出されたるものは、借受人によつて小切手を以て支拂に充てられたときに、その支拂を受けた人が、これを現金を以て引出すことなく、更にそれを自分の預金とするがため、銀行は、これを本として、また貸出を行ふことを得、この貸出が預金となり、預金がまた貸出となるといふことを、或範圍まで、反復繰返すことによつて、預金の膨脹する點は、未だ彼によつては、明瞭に認識せられては居ないのである。

マクロウドは、銀行の信用創作を強調して次の如くに言つて居る。

へかくて、吾々は、銀行及び銀行家の主要且つ顯著なる特色は、要求に従つて支拂はるゝ信用を創作し且つ放出するにある (*to create and issue Credit payable on demand*) ことを見た。そして、この信用は流通に置か

れ、貨幣としての總ての目的に役立つことを、意圖せられて居るのである。それゆゑに、銀行は、貨幣の貸借のための機關ではなくして、信用の製造所である。¹⁾

この後半の文言の *A bank, therefore, is not an office for borrowing and lending Money: but it is a Manu-
factory of Credit* は、銀行信用に關する理論的研究者として著名なるアルバート・ハーンが、その *Volkswirt-
schaftliche Theorie des Bankkredits* のタイトルページに獨譯までして掲げられたものである。²⁾

併し、その謂はゆる信用の創作なるものは、マクロウドの説明によると、大要次の如くである。

——銀行が多數の預金者より、一萬磅の現金の預け入れを受けると、平常時に於ては、預金に對して凡そ一割の現金を手持ちして居れば、その引出要求に應ずるに充分であるから、一千磅だけを留保して、殘餘の九千磅を貸出すことが出来る。併し、このことよりして、銀行が、九千磅の現金を以て、手形の買入れをなすものと思はゞ、大變な間違ひである。さういふことは、ビル・ブローカーのすることでは、銀行のすることではない。銀行は、一千磅の現金は、一萬磅の預金を支へるに充分であることを知つて居るから、この一萬磅の現金を本として、それに幾倍かする所の手形を信用を以て買入れるのである。すなはち、現金の支拂をするのではなく、買入代金を賣手の預金として手形を買入れるのである。——

——假に、この場合、銀行は、四萬磅の三ヶ月拂の商業手形を買入れたとする。そして、この利子、すなはち割引料を四歩とすれば、その利益は四百磅であつて、これは、買入代金より差引かれるのであるから、四萬磅の手形に對して、三萬九千六百磅の預金が更に増加することとなる。従つて、預金の總額は、最初の一萬磅と共に、

- 1) Henry Dunning, Macleod, *The Theory and Practise of Banking*, 5th Ed. Vol. I, p. 326.
- 2) Albert Hahn, *Volkswirtschaftliche Theorie des Bankkredits*, Dritte Aufl. 1930-. "Eine Bank ist nicht eine Anstalt zur Aufnahme und zum Ausleihen von Geld, sondern eine Anstalt zur Erzeugung von Kredit."

四萬九千六百磅であり、この債務に對して、その資産は、現金の一萬磅と、手形の四萬磅、合計五萬磅である。差額の四百磅がこの取引に於ける利益で、銀行の財産となるものである。――

――この取引に於て、銀行は、既存の現金量に對して、三萬九千六百磅を、信用に於て創作したのである。――マクロウドの見る所は、かくの如く、銀行の貸出といふ一面だけであつて、その反轉による預金としての信用の膨脹といふことは、見逃されて居るのである。銀行が手形を買入れる。而も、その代金は、現金を以て支拂ふのではなく、手形賣手の自行に於ける預金とする。それによつて、銀行の預金が膨脹する、すなはち信用が膨脹する、といふことは、リハード・ライシュが語調を藉つて批評すれば、正に《預金の單性生殖説》(eine Theorie der Parthenogenese der Depositen)と言ふべきであらう。どうして左様なことが可能なのか?といふ謎が、吾々に残される。

四

銀行の通貨創作といふことを、その貸出の一面に見るに止まらず、その貸出が預金となり、更に貸出となり、また預金となるの關聯的反轉に於て、預金としての通貨膨脹に、その意義を認めたる最初の學者は、私の知る限りに於ては、ウキザースである。すなはち、ウキザースは、マクロウドが、銀行の創作通貨は、銀行より貸出したる *loan* にのみ單純に依存すると見るに對し、それは *mutual indebtedness* (相互負債)にあるといふのである。いま、その説く所を引用すれば次の如くである。

《現代の英吉利の商業と金融とに於ける貨幣は、小切手である。そして、倫敦の金融市場に於て、取引せられ

1) Richard Reisch, Die „Deposit“-Legende in der Banktheorie, Zeitschrift für Nationalökonomie, Band I, Heft 4, (Wien 1930); S. 500.

る信用は、小切手振出の権利である。そこで、吾々は、小切手振出の権利なるものが、如何にして創作せられるかを見出さねばならぬ。そして、吾々の見出したる所は、それは一般に銀行のなす所の貸出 (Advance) によつて創作せられるといふことである。¹⁾

——バクレイス、ロイヅ、ミツドランド、ナショナル・プロヴィンシアル及びウエストミンスターの五大銀行の貸借対照表を要約して見ると、²⁾ 銀行から取引先に貸して居る金額の丁度四分の三は、取引先が銀行から何等かの形で借りて、それをまた銀行へ預けて居るものなることが、明かになつて来る。……かくて、銀行預金の大部分は拂込まれた現金からなるのではなく、借りられた信用からなるものなることが分る。³⁾

こゝでウキザースは、*“every loan makes a deposit”* (貸出資金はどれもみな預金となる) といふ簡潔なる文句を以て、その説を表徴的に言ひ表はして居る。更にへ一つの銀行の貸出資金は、他の銀行の預金となり、一つの銀行の預金は、大部分は他の銀行の貸出資金より成る。⁴⁾と附け加へて居る。そして、預金となるものは、單に貸出資金だけではなく、銀行が有價證券の買入をなしても、やはりそれは、預金となると述べて居る。すなはち⁵⁾ 銀行が株式取引所證券に投資した場合に於ても、同じ結果を、——自行または他の銀行の預金の増加を——惹き起す。

マクロウドは、前に述べたる如く、銀行を以て *Manufactory of Credit* (信用の製造所) と言ひて、恰も銀行が獨自に信用を創作するものと見て居るのであるが、ウキザースは、この點について次の如くに言つて居る。

銀行は、この信用の創作を、その取引先の共助なくしてはなし得るものではない。これらの銀行信用は、銀行

1) Hartley Withers, *The Meaning of Money*, Fifth revised edition, p. 54.

2) *ibid.*, p. 60.

3) *ibid.*, p. 62.

4) *ibid.*, p. 63.

によつて作られるのではなく、銀行にそれを求める所の取引先によつて、更にはまた、見返りとして、取引先が提供し、銀行が承諾する所の擔保によつて、作られるのだと主張してもよいだらう。¹⁾……この作出が、銀行によつてなされたものか、その借手たる取引先によつてなされたものか、といふことは、次の事實が了解させられるならば、左程重要な事柄ではない。すなはち、銀行の貸借對照表に示されたる預金の大部分は、割引か、貸付かまたは過振りかの、どれかの形に於ける、記帳上の信用といふ手段によつて、銀行が取引先に許容し、取引先よりまた他人に移讓せられることによつて、出來たものたるには間違ひはない。²⁾

貸出による預金の膨脹は、銀行が作るのか、取引先が作るのかといふことは、重要な問題でないのではなく、學說史的に見れば、ウキザースが、"It cannot conduct this manufacture without the assistance of its customers" と言ひ、且つ "the loans of one bank make the deposits of others, and its deposit consists largely of other banks' loans" と説明したのは、むしろ、これによつて、マクロウド流の「預金の單性生殖説」より脱出した所の一大進歩なのである。

併しながら、ウキザースは every loan makes a deposit といふことに餘り重きを置き、預金となるのは貸出されたる資金なることを忘れて、貸出そのものと預金とを具體的に關聯するものゝ如くに考へ「銀行預金の金額は、それだけ(貸出の金額だけ)増加し、その貸出が存續して居る期間、預金として殘留するものである」(the sum of banking deposits is thereby increased, and remain so, as long as the loans are in existence)³⁾ といつて居るは、大變な誤りである。貸出を受けたる人が、後に、その貸出を返済しても、先にその貸出資金を以て支拂を受

1) *ibid.*, p. 70.
2) *ibid.*, p. 71.
3) *ibid.*, p. 62.

け、これを銀行に預け入れた人の預金は、それによつて消滅するものでないからである。貸出と預金とは、一般的に見れば、大體に於て相關聯して居るけれども、具體的には、その關聯性はその貸出資金が、借受人によつて支拂に充てられたるときを以て終るのであつて、支拂に用ゐられたといふことがその關聯を斷絶して、雙方を獨立のものとなすのである。

五

ウヰザースによれば、預金なるものは、銀行の貸出や有價證券投資によつて、膨脹するものなることが説明せられたけれども、未だその限度が明かにされて居ない。たゞ彼がそれについて説く所は次のことだけである。

「銀行の貸出す信用なるものは、要求次第支拂はるべき小切手を振出す権利を表はすものであるといふ事實があるのではないならば、銀行の貸出す所の限度なるものは、たゞ、その取引先の需要と、彼等が提供する所の擔保の金額とによつて制限せられるに過ぎないであらう。併し、この最も重要な事實は、銀行の責任に對して、適當なる現金準備は幾何であるかといふことを、この問題に於ける缺くべからざる要素たらしめた。」¹⁾

すなはち、銀行信用の膨脹は、銀行取引先の擔保を伴つた需要と、銀行の現金準備との二つによつて制限せられるといふのである。そして、こゝに言ふ所の現金準備は、「銀行の貸出す信用なるものは、要求次第支拂はるべき小切手を振出す権利を表はすもの」であつて、この「責任に對して適當なる現金準備」のことを謂ふのであるから、それは、預金に對する現金準備といふよりも、奇怪にも、貸出に對する現金準備といふことゝなる。然るときはそれは、むしろ、銀行の手許遊資といふべきものに外ならぬことゝなる。

1) *ibid.*, p. 76.

併し、それはともかく、銀行の貸出は手許資金なくして行ひ得ないものたるは確かである。ウヰザースはいふへ慎重なる銀行經營は、その與へる信用の限度を、銀行手持の法定現金 (Legal tender cash) の額に依存せしめねばならぬことを要求し、且つそれは、金、或は英蘭銀行券に外ならぬのであるから、各銀行の手許に於て、または、各銀行の銀行たる英蘭銀行の手許に於て、利用し得る所の金の額なるものは、信用の供與に對して重大なる影響をもつものである。¹⁾

然らば、この法定現金は、如何にして銀行の手に入るか？ それは商業銀行としては、やはり預金としての預け入れに俟つの外なきものであらう。茲に至つて、預金に、貸出若しくは、投資による預金と、法定現金の預け入れより成る預金との區別なるものを、認めなければならなくなつた。ウヰザースはいふ、へ結論の概要をいふならば、銀行預金なるものは、その小部分は、窓口を通じて拂込まれる現金より成るものであり、それより幾分大なる部分、併し尙ほ比較的小部分は、帳簿上の信用を創作する所の銀行の有價證券買入に基き、そして、その最大の部分は、これも帳簿上の信用の創作である所の、銀行よりの貸出より來るのである。²⁾

預金のこの分類は、歸する所、現金の預け入れより成る預金と、信用の創作より成る預金との二つのものに外ならぬ。そして、ウヰザースの説は、それを通覽すれば、第一の現金の預け入れより成る預金としての資金が、貸出されて第二の種類の預金となることによつて、預金の膨脹すなはち Manufacture of credit なるものが生ずることを明かにせんと試みたものなることが分る。

六

1) *ibid.*, p. 79.
2) *ibid.*, p. 71.

、預金の膨脹といふことを研究するには、膨脹の基本たる預金と、膨脹したる預金とを區別することは、もとより必要である。ウキザースも、現金の預け入れより成る預金を、この基本たる預金と見做した。こゝに、現金といふのは、勿論英語「cash」の譯語として用ゐたのである。併しながら、こゝに注意すべきことは、cashといふは日本語の現金よりも意味が廣く、銀行が發券銀行（英蘭銀行）にもつ所の何時にても引出し得る所の預け金をも併せ意味するのである。「cash in hand and at the Bank of England」といふ言葉からもこのことは明かである。それに對する單なる現金は、legal tender cash と謂はるゝ所の「gold & Bank of England notes」と及び補助貨幣とがあるのである。序に、獨逸語の Bargeld は、この單なる現金の意味である。¹⁾

さて、膨脹の基本たる預金と、膨脹したる預金とを、明瞭に——併し正當ではないが——區別したのはフィリップスである。すなはち言ふ。

《新しい現金または準備金 (new cash or reserve) が、一つの組織をなせる諸銀行によつて、その幾倍かに當る廣汎なる貸付金 (loans) の膨脹の基礎となるの筋道に關する説明は、本源的預金及び派生的預金 (Primary and derivative deposits) とも名づけ得べき——より適切なる言葉がないから姑かく名づくる——兩者を、慎重に區別することによつて、明瞭になすことが出来る。本源的預金といふは、一つの銀行に、現金か、若しくは、他行に宛て、振出された小切手手形の如く何時にてもそれに代り得るものかの、現實なる預け入れより成るもので、併し借受金の返済に充てる目的を以てなされたものでない所の預金であると定義することが出来る。派生的預金といふのは貸付金から直接に生じたもの、または、借受金の返済の目的を以て借主が積立てた所の

1) Withere, *ibid.* p. 62, 66, 76.
2) Withers, *ibid.* th. 79.
3) Richard Reisch, a. a. (.), S. 489.

預金である。¹⁾

フィリップスは、この本源的預金なるものが、貸出によつて、派生的預金として、膨脹發展するものなることを説くのであるが、その詳細は、中谷學士が既に紹介せられた所²⁾であるから、これを省略し、こゝには、たゞ行論の順序上必要なことだけを述べることとする。

フィリップスは、代數式を藉つて、預金の膨脹を説明する方法をとつた所の或は最初の學者であるかも知れない。彼は、先づ、單に一個の銀行しか存在しない場合を假定し、それに c なる現金が預け入れられたる場合、 R の支拂準備率の下に於ては、既存の貸出に對し更に何程の貸出増加をなし得るか、といふことより説明を初めて居る。

フィリップスの見る所によると、この場合、預金の c に對しては、 R_c の準備金を必要とするから、それを預金額より控除し、その殘額たる $(c - R_c)$ を以て支拂準備とすれば足る所の預金は $\frac{1}{R} (c - R_c)$ or $\frac{c}{R} - c$ である。そして貸出したる資金が、總て預金となるのであるから、この $\frac{1}{R} (c - R_c)$ or $\frac{c}{R} - c$ が、この場合、現金預金 c を基本とする所の貸出の極限であり、且つ預金膨脹の極限でもあるといふのである。そして、前の現金預金 c とこの膨脹部分の預金 $\frac{c}{R} - c$ との合計 $\frac{1}{R} c$ or $\frac{c}{R}$ が、預金の總額となると説明して居る。³⁾

この場合に於て貸出金は、フィリップスによれば、(貸出膨脹の結果として、何等現金に於て失ふ(流通界に滞留する)所はない⁴⁾)のであり、(現金が失はれる(流通界に滞留することのあるのは、物價騰貴の結果として、轉々支拂に充てられる現金の需要が増加した場合である。)⁵⁾

1) Chester Arthur Phillips, Bank Credit, N. Y. 1921, p. 40.

2) 中谷實著、預金通貨の研究。72頁以下。

3) ibid., p. 39.

4) ibid., p. 39.

5) ibid., p. 39, foot-note.

フィリップスは、單に一個の銀行より存在しない場合を觀察するは、結局、多數の銀行が存在して居つても、それらが完全なる一つの組織に團結して居る場合を觀察すると全く同一であると見做して、この「孤立銀行の貸出膨脹」(the loan expansion in an isolated bank)を以て、そのまゝに「全般の銀行を一體として見たる場合の貸出膨脹」(the loan expansion in the banking system)を説明したことにして居る¹⁾。

そして、この全般の銀行を一體として見たる場合の貸出膨脹と、それらの中の一つの銀行に於ける貸出膨脹とは甚だ異なる所であるとなし、その場合に於ける貸出膨脹の極限、すなはち、預金膨脹の極限は $\frac{C}{C+T+K}$ であると居る。

この場合に於て、フィリップスが特に考慮に置いたのは、この式に於て k を以て表はした所の、借受取引先が、借受金の振替へによつてもつ預金残高の借受金に對する割合といふものである。銀行の側より言へば、貸出に對し、その貸出よりの派生的預金の平均残高の率といふものである。借受取引先は、借受金を即時に金額引出すものではなく、慎重なる人々は、支拂の必要の生ずる一兩日前に借受契約を結ぶのであり、また、返済期日の前には、逐次、返済資金を預金として——この預金は、フィリップスによれば、派生的預金である——積立てるものであるといふことゝ、またフィリップスの説明によれば、北米合衆國の多くの都市に於ては、銀行は、その貸付金に對する一定割合を、多くの場合に於ては二割を、預金として殘留することを要求するといふことであるといふことのために、かゝる預金には、平生、或る額の残高があるものであり、その平均残高が、その貸出金額に對して占むる率が、 k を以て表示せられて居るのである。²⁾ フィリップスはこれを頗る重要視して居るのである。

1) *ibid.*, p. 40.
2) *ibid.*, p. 42.

フィリップスは、更に右の式を誘導するについて、 c を預け入れを受けたる現金額、 c_1 を銀行が貸付をなすによりて、その銀行より引出さるゝ現金額、 x を c 額の現金預け入れによつて擴張し得る所の貸出額、 r を、預金に對する現金準備率として居る。然るときは $(1-r)c$ は、借受取引先が、その借受金より現金引出をなす金額の借受金額に對する割合であるから $c_1 = (1-r)c$ となる。

然るに貸付をなす銀行は、貸付をなすに當り 前の本源的預金に對すると同様に、その貸付より生じたる派生的預金の残額に對しても、支拂準備を用意しなければならぬといふ見地から、フィリップスは支拂準備の額を、 $(rc + kx)$ として居る。それゆゑに、貸出によつて流出する現金 c_1 は、この側より言へば、前の預け入を受けた現金額 c より、 $(rc + kx)$ を控除した残額に等しい。すなはち、 $c_1 = c - (rc + kx)$ である。フィリップスは、この式と前の $c_1 = (1-k)x$ の式とより、次の如くに誘導した。

$$(1-k)x = c - rc - kx$$

$$kx + (1-k)x = c - rc$$

$$x = \frac{c(1-r)}{kr+1-k}$$

六

この式は、多數の銀行によつて一つの金融組織が構成せられて居る状態の下に於て、その中の一つの銀行に現金が預け入れられたる場合、その銀行は、それを基礎として、幾何まで貸出を膨脹し得るかを表示するものとして、フィリップスの提示する所のものである。そして、いま假に一千弗の現金が預け入れられ、預金準備率一割、

貸出金に對しその振換へより成る派生的預金の引出平均残高二割とすれば、この式により、その銀行のこの一千弗の現金預金を基とする所の貸出膨脹額は、次の如く、一千九十七弗五十六仙となるといふのである。

$$x = \frac{1000(1-.10)}{.02+1-.02} = \frac{900}{.82} \text{ or 弗 } 1097.56$$

併しながら、フィリップスの如く、貸出金なるものは、その全額が引出さるゝものでなくして、一定割合は、派生的預金として、常に、残留するものなることを、考慮に入れて、貸出の膨脹限度を數式的に表示する必要があると認むるならば、營業としての銀行家の立場に於ては、これと異なる數式が見出されねばならぬ。何となれば、平均的に必ず残留する派生的預金なるものに對して、その引出に對する準備金を用意するといふことは、無意味であるばかりではなく、兩立し得ざる考へ方であるからである。

すなはち、前掲の如く、假に、貸出金 x に對して、 k の率だけは、派生的預金として現金が残留するもので、従つて、引出さるゝ現金額の率は $(1-k)$ でありとするならば、 kx に對しては、支拂準備金を用意するの必要はない。そこで、 c の現金預入れを基礎とする所の最初の貸出額は、 $(1-k)$ の額に止めるの必要はなく、銀行としては、 c の預金に對して cr の準備金を残存せしむれば、必要にして十分なのであるから、貸出金は、初めから、手許に cr の現金だけが残存する考慮の下にこれを行へばよい譯である。換言すれば、貸出によつて、實際引出される額を考慮して、その貸出額を定めても、預金に對する準備を害することゝならない筈である。 $(1-k)$ を内割で計算するのではなく、外割で計算して差支なき道理である。従つて、 c の現金預金を基礎とする所の、貸出膨脹額は、 $\frac{c(1-r)}{(1-k)}$ である。この額は、 $(1-k)$ が 1 より常に小さいのであるから、 $c(1-r)$ より大である。従つて、

それだけの全額が引出されるならば、準備金は cr より小さくなり、準備の確實性を害することとなる。併し、 $\frac{c(1-r)}{(1-k)}$ の貸出をしても、實際引出されるのは、その全額ではなくその $(1-r)$ の割合だけの額であるから、結局 $\frac{c(1-r)}{(1-k)}$ すなはち $(1-r)$ である。そして、これだけの額が貸出の結果引出されても、手許には、 cr が残るのであるから、支拂準備として、確實性を保つのである。

いま、フィリップスの掲げたる數字を以て説明すれば、一千弗の現金預金が出来た場合、一割の準備率に於ては、一百弗を保留すればよいのであつて、九百弗は、全然、引出されても、差支ないのである。九百弗が現金として出て行つても、預金に對する支拂準備の安全確實を害することはない。併し、フィリップスによれば、貸出金は、その二割が、派生的預金として殘留するのであり、八割だけが引出されるのである。従つて、九百弗が八割に當る所の金額、換言すれば、九百弗の外八割を貸出すときは、その貸出によつて九百弗全部が出て行くこととなる。すなはち、その金額は一千二百二十五弗である。一千二百二十五弗を貸出せば、その二割の二百二十五弗は銀行に派生的預金として殘るのであり、その八割の九百弗が、現金として引出される。然る場合、銀行は、前の預け入れを受けた預金一千弗に對しては、尙、その一割に當る一百弗が準備金として殘留して居る。そしてこの派生的預金の二百二十五弗は、引出されることはないのであるから、これに對しては準備金を必要としな

す。

かくの如き次第であるから、フィリップスの前提の下に於ては、その求むる式は、 $\frac{c(1-r)}{kr+1-k}$ ではなくし

$\frac{c(1-r)}{(1-k)}$ でなければならず、これを前の例の金額を以て示せば、一千弗の現金預金を基として貸出し得

る額は、一千九十七弗五十六仙でなくして、一千二百二十五弗なのである。

右に述べたる所は、一つの銀行に於ても、多數の件数の預金があり、多數の件数の貸出がある場合に、その中の一件の貸出としての事柄である。すなはち、全體、平均的の中の一つとしての事柄である。そしてまた、フィリップスの言ふが如く、*“Indeed borrowers are required by many city banks to maintain an average balance equal to a definite percentage, usually 20 per cent, of the maximum credit extended;—a circumstance that tends to prevent the withdrawal of the entire amount borrowed.”* といふ事情の下に然るのである。若し、銀行が、たゞ一件の貸出をなす場合を考へるならば、すなはち開業早々第一回の貸出を、最も慎重に行ふとすれば、このときには、フィリップスの式が、それに當て嵌まる所のものであらう。然しその場合に於ても、たゞ一件の要求拂預金しかもたないものとすれば、全額を準備金となさねばならぬから、貸出は不可能と言はねばならぬ。併し、もしも、引續き第二第三第四第五の預金があり、またそれによる貸出が行はるゝものとすれば、そのときの式は、やはり、私の修正したるものでなければならぬ。

七

更に、フィリップスの言ふが如く、この派生的預金の残高なるものを、特に、考慮に入れるとすれば、それと預金に對する支拂準備金なるものとの關係を觀察する必要がある。すなはち、預金として受け入れた資金を、貸出に當てたとき、その貸出金の一定部分が、全體、平均的に見て、必ず常に引出されずして残るものとすれば、その手許に残留する金額は、預金に對する支拂準備金の額を計算するに當つて、その中に織り込んで差支なきも

のである。併しそれは r が k より大なる場合に於て、意味のあることであつて、 k が r より大なる場合には、意味のないこととなる。

然るに、フィリップスは、 k を r より大なるものとして居る。すなはち、預金に對する支拂準備率を一割となし、貸出金に對して、それによつて生ずる所の派生的預金の平均残高を二割として居る。これは甚だ奇怪なる假定である。いま一千弗の現金預金が出来たとすれば、この假定に従へば、その銀行は、一百弗を先づ支拂準備に充つてあらう。そして、九百弗を貸出すであらう。然るに、この九百弗の中で、現實に引出されるものは、その八割で、二割に當る一百八十弗は、全體、平均的に見て必ず手許に残ること明かなのである。然らば、既にそれだけで、預金の支拂準備として必要にして十分なる額を超ゆるのであるから、銀行は、何故に初めに、一百弗といふ金額を、支拂準備として、手許に保留する必要があるのか？ いな、一千弗の全額を貸出に充てたところで、その二割の二百弗は、手許に残留する筈である。それだけでも既に支拂準備金として、必要なる額の二倍である。ゆゑに、貸出金に對しては、その二割が引出されずに残留するものであるといふことが正しければ、そして同時に、預金に對する支拂準備は、その一割を以て、必要にして十分なる額であるとするならば、貸出金の引出残留額を見込む限り、この一割の準備金を保留することは全く無用であるといはなければならぬ。

かゝる不合理なる事柄は、銀行が、その營業を自由に行ひ得る場合には、全く考へ得ざる所である。併しながら、かゝる不合理なる事柄も、一應、合理的の事柄として考へられる場合がある。それは、法制上、一定の支拂準備が強制されて居る場合である。然る場合に於ては、銀行は、預金に對して、とりあへず、その法定率の準備

金を保留したる後でなければ、貸出をなすことが出来ない。そして、その貸出金が、全額引出されずして、一部分平均的に残留する場合に、初めてフィリップスの如き公式が、一應、考へ得るのである。我が國の如く、法定準備金の制度をとらざる國に於ては、かゝるフィリップスの如き考へ方は、全く無用であり、誤謬である。

殊に、法定準備金制度の場合に於ても、貸出の一部分が、平均的に必ず残留するものとせば、前にも指摘したるが如く、銀行は、それを考慮に入れて、必要準備金が残留するやうに貸出額を決定すればよいのであつて、フィリップスの提示したる公式は、その場合に於ても、實情に當て嵌まらざるものといはなければならぬ。

八

マクロウドに初まり、ウヰザース、フリッブスに至るまで、銀行の創作する通貨の膨脹、すなはち、その貸出による預金の膨脹を考へるについて、その膨脹の基本たる預金は、いづれも、現金の預け入れによつて成るもの (one that arises from actual lodgment of cash) として考へられて居る。

併しながら、問題は、貸出による預金の膨脹にあるがゆゑに、その根本の預金は、貸出によらざる預金でなければならぬ。それは、一つの銀行のみについて言ふも、多數の銀行の全般について言ふも同じである。いま、現金の預け入れといふことをとり出して考へて見るに、その現金自身が、貸出によつて銀行より出た場合には、その現金の預け入れによる預金も、やはり、貸出による預金に外ならない。それゆゑに、現金の預け入れによつて出来た預金といふものを以て、貸出による預金の膨脹の根源たる預金と見ることは、そこに大なる誤謬を包蔵することゝなる。然らば、この根源たる預金は、果して、如何なるものであるか？ それを明かにするために、私は、更に、二三の學説を検討せねばならぬ。

——一三・一八——

1) Philips, *ibid.*, p. 40.